

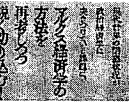
## 【Book Review】

## マルクス経済学の理論的意義と「方法」を再考する好著

マルクス経済学の

方法と

伊藤誠



現代世界

【伊藤誠『マルクス経済学の方法と現代世界』

（桜井書店、二〇一六年）】

小幡道昭（元東京大学経済学部教員）

現代世界における資本主義と社会主義の根底に共通する危機の実に迫るべく、マルクス経済学の「方法」を再考する本書は、前半二章、後半二章の二部からなる。

第一章「マルクスにおける経済学の方法論」では、『経済学批判要綱』の「序説」、『経済学批判』の「序言」、『資本論』の「初版序文」、『第二版後記』を順次たどりながら、マルクス自身は、理論的内容は基本的にそれを支える方法論を要しない（七一頁）という立場を固めていったことが示される。第二章「宇野理論の課題と方

法」では、新旧『経済原論』『序論』を検討し、そこに示された「方法論」は、『資本論』の場合と同様、原理論の本論を直接支え導く前提ではないとしながら（一二六頁）、ただ、原理論の対象を純粹な資本主義に限定することで、実は（一二八頁）、その外部の世界との関連に考察を広げ、また歴史的にも古代、中世（そして社会主義）の社会の研究の基礎となる「広義の経済学」の余地を示したという。歴史と理論を融合させた『資本論』に対して、宇野は資本主義の歴史的現象を分離し、理論を独

自の原理論に純化圧縮したことで、かえってその射程を広げたのだという逆説で、この広がりの中に、現代の資本主義や二一世紀型社会主義を考える基礎としての原理論の役割を読みとるべきだと説く。「はじめに」をみると、「本書はおもにこの論点（原理論の現代への直接適用）において宇野の方法論に逆らっている」（六頁）と明言されており、宇野の方法論を正面から批判し、独自の解決策を提起するのかと思いきや、豈図らん、宇野の方法論をよく読めば、実は直接適用説がでてくるのだという

話で、余計な期待を抱いた者は、「解釈」で「批判」をかわす肩すかしに啞然とする。

たしかに、方法論というのは、いったんできあがったものを後から反省的に捉え返す「へ理論」についての理論」であり、対象となる「理論」が先になければ、その「展開方法」を論じ得ぬのは道理。その意味で、マルクスの方法論先行説批判、方法論不要説は常識の範囲に収まる。しかし、マルクス没後、できあがった『資本論』の受容をめぐる浮上した方法論は性格を異にする。自由主義段階のイギリスを例解にとる『資本論』を、帝国主義段階のドイツに、あるいはそもそもマルクスの眼中になかった極東の日本にどう使ったらよいのか、その「適用方法」が焦点になる。もし、理論が複雑な現象を単純化した近似モデルにすぎぬなら、現実には「当てはまる」から役にたつ、当てはまらない現象が出現すれば、新しい理論に修正すべきだということで話は終わ

る。ところが、資本主義の歴史的発展が解明課題になると、通常の近似モデル型の理論ではすまない。これまで当てはまった理論が「当てはまらなくなったこと」こそが、対象の変容を知る力ギとなるからである。

本書の第二章前半でも紹介されているように、一九世紀末以降、資本主義の新たな発展に直面するなかで、修正主義論争や日本資本主義論争など、『資本論』の適用をめぐる一連の論争が展開されてきたのであり、これに意識的な反省を加えた側面に、宇野の方法論の意義を認める読み手もいる。そうした目には、『資本論』との「方法論的切斷」が鮮明に浮かびあがってくる。これに対して本書は、宇野の方法論のうちに、マルクスの方法論不要説が原理論の純化として独自に継承されたという「方法論的連続性」を読みとり、その外延に現代資本主義や社会主義の可能性を理論的に考察する地平が拓かれる点が重要だと説く。

『資本論』はもとより新旧『経済原論』にしても複雑なテキストであり、違った読み方ができる。読み方の適否は当然問題になるが、ただ、「解釈として正しい」ということと「解釈された内容が正しい」ということは別の問題である。本書がそうだというわけではないが、マルクス経済学は一般にこれまで、「マルクスがもう少し生きていたらこう考えたはずだ」とか「それは宇野の誤読で真意は実はこうだ」といった解釈論議に傾きすぎてきた。「解釈」徒や疎かにすべからず、然り。されど「解釈」は考察対象を確定する手段、確定された言説の真偽適否の「批判」こそが真の目的。第一部のマルクス、宇野の方法論解釈の是非は第二部の評価にかかると。

第三章「現代資本主義とマルクス経済学の方法」では、宇野の「純粋資本主義論」に対して提示された鈴木鴻一郎・岩田弘の「世界資本主義論」の意義にふれ、高度成長期の説明としては大内力の「国

家独占資本主義論」より「レギュラシオン理論」のほうはまだマシとしたうえで、著者自身の「高度成長期とその終焉の論理」を提示し、年来の持論たる逆流仮説に論を進めている。この本丸は、推量文や反語的疑問文の連続に、「加えて……」「……とともに」「……とあわせて」「……しつと」と附言が重なり、簡単に割り切れない記述になっているが、短兵急に切り込めば難点は三つ。

一つ目は、帝国主義段階と「逆流する資本主義」の関係である。一言でいえば、逆流現象を伴う「新自由主義的グローバル資本主義」は帝国主義段階のサブサブステージであり、ポスト帝国主義の段階をなすものではない(一九四頁)という主張である。サブサブといったのは、第一次世界大戦で、帝国主義段階を古典的段階とその後の現代資本主義のサブステージに分け、後者の三局面として、両戦間期、戦後高度成長期、そして「逆流する資本主義」が位置づけ

られているからである。このかぎりでは逆流は、宇宙のいう純化傾向の逆転を再逆転するようなものではなく、帝国主義段階の枠内での反転に終始し、どこまでいっても新たな段階に転じる契機にはならない。

二つ目は、逆流の行き先についてである。どこに向かって逆流するのか、さしあたりは「一九世紀末以降の資本主義の発展の方向を大きく反転して、それ以前の競争的資本主義」に向かうととるのが至当だろう(一九九頁)。それなら、いちおう純化傾向のミニ版として了解できる。ところがつづけて、バブル崩壊を繰り返す現状は「重商主義段階の恐慌現象を想起させる」(二〇〇頁)という段になると、読者としては行き場に迷う。どんどん過去にさかのぼれば似た現象はでてくるもの、だがそれでは「逆流」の逆の意味が逆になり、逆流という概念は霞むばかり、原理論と段階論の研究の全成果を「総合して活かす」(二〇〇頁)

といつても、異質なものをただ総合すると、かえって訳がわからなくなる。

三つ目は、原理論を現実の分析に「活かす」というときの活かし方である。逆流仮説の核心は「貨幣恐慌」なども含め『資本論』の原理が当てはまる現象が広がっているという現状認識にあり、そこから原理論は、近似モデル型の理論として、現実分析に直接適用できるといふ結論もでてくる。逆にいえば、先行する高度成長期や、さらに逆流以前の帝国主義段階への直接適用は、宇宙と同様、無理なことになる。理論が現実だに「当てはまらなくなった」ことに意味を見いだした宇宙の不純化仮説と、「当てはまるようになった」から活かせると説く逆流仮説との方法的対蹠はここに歴然となる。

このあと「宇宙三段階論の継承と発展の試みの一つとして、「山口・小幡論争」(「原理論の論理的再純化+類型論としての段階論」

対「変容論的原理論十多重起源説的段階論」の純粹・変容論争)の解説にかなりの頁を割いているが、両者に実は大差なしとする超然主義に、どっちつかずの逆流仮説の特徴がよく現れている。

第四章「マルクス経済学とこれからの社会」では、まず、宇野の『資本論』と社会主義』が批判的に検討される。論点は多岐にわたるが、方法論としては、ソ連型社会崩壊を知りえなかつた宇野は、社会主義経済を理論的に考察することを抑制した(二四三頁)が、その崩壊はこの禁忌を解いたという逆説で、社会主義への原理論の直接適用が支持される。この方法論を基礎に、続く「二一世紀型の社会主義と社会民主主義」では、「新自由主義的グローバル資本主義に批判的に対抗する社会運

動」として、資本主義を否定する「狭義の社会主義」も、資本主義のもとでその改良を求める「社会民主主義」との「連帯・協力」を進めるべきだと説く(二九二頁)。なにやらかつての「二段階革命論」を彷彿させる主張だが、「連帯・協力」といつてみても、いまある「広義の社会主義」の中味は須く、多様な社会民主主義の雑多な集合である。真の問題は、この社会民主主義のベースをなす福祉国家が、今日、左右に揺さぶられているところにある。社会民主主義が追求してきた福祉の拡張は、その対象となる「国民」の範囲を限定し、「国民国家」の存在を前提とする。こうしたなかで、かつての第三世界の一極で新興資本主義国が台頭し、他極で大量の難民を生み出すような社会崩壊が激化す

れば、国民国家あるいは広域統合体の内部で温室培養されてきた社会民主主義は、国家の「壁」を高くせよと迫る一国主義・ポピュリズムの力で、左右に分裂する運命にある。もし現実の運動として「狭義の社会主義」の誕生を期するのであれば、かつてのマルクス主義の発想を脱し、あらためて一介の社会民主主義者としてこの分裂のなかに身をおき、自己の限界を内面的に探る覚悟が必要であろう。

かなり辛口の書評となつたが、批判は師門の習い、本書を些かも貶めるものではない。二〇世紀末にはじまる資本主義の大地殻変動に対して、たえず諸説に配慮を払いつつ、マルクス経済学の理論的意義を一途に問い続けてきた老師の営為が集大成された好著といえよう。